

納棺夫 日記

増補改訂版

青木新門

文春文庫



文春文庫

のう かん ふ につ き
納棺夫日記 増補改訂版

定価はカバーに
表示してあります

1996年7月10日 第1刷

1996年11月30日 第3刷

著者 あお き しん もん
青木新門

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-732302-8

文春文庫

江苏工业学院图书馆

納棺大日記

藏書章

增補訂版

青木新門



文藝春秋

序文　美しい姿

吉村 昭

二十年以上前、私の前に現われた青木新門さんは、詩人としてであった。小説も書いているというので、私が編集委員をしていた文芸投稿誌「文学者」への投稿をすすめた。やがて、短編小説が送られてきて、読んだ私は、即座に採用することをきめ、その作品が「文学者」に発表された。詩人としての眼が光り、雪国に生れ育った青木さんの身にしみついた雪の感覚が強く感じられた。

それから十年ほど会うことはなく、五年前に拙宅に現われた時は、葬儀社の社員としての青木さんだった。

この度、『納棺夫日記』を著わしたが、詩をつくり小説を書いていた青木さんとしては自然なことだと思う。

当然のことながらこの作品には、詩人としての息づかいと、小説を書いていた人としての素質が感じられる。そして、その背景には雪がある。

納棺を職業とする人が書いたものを、私は読んだ記憶はなく、その存在も知らない。恐らくこれは最初のものにちがいない。

人の死に絶えず接している人には、詩心が生まれ、哲学が身につく。それは、真摯に物事を考える人の当然の成行きだが、『納棺夫日記』には、それが鮮やかに具現されている。この作品の価値は、ここにこそある。

死体をいただき、納棺する青木さんを、私は美しいものと感じ、敬意を表する。

目次

序文 美しい姿 吉村昭 3

納棺夫日記 7

第一章 みぞれの季節 9

第二章 人の死いろいろ 47

第三章 ひかりといのち 85

著者注釈 145

『納棺夫日記』を著して 157

あとがき 208

文庫版のためのあとがき 211

光の溢れる書 『納棺夫日記』に覚える喜び 高史明 215

納棺夫日記

第一章 みぞれの季節

今朝、立山に雪が来た。

全身に殺気にも似た冷気が走る。今日から、湯灌^{ゆかん}、納棺の仕事を始めることにした。言い出して、二、三日逡巡していたが広言した手前もある。思い切って実行した。

湯灌といっても死者を湯あみさせるわけではなく、死体をアルコールで拭き、仏衣と称する白衣を着せ、髪や顔を整え、手を組んで数珠を持たせ、納棺するまでの一連の作業である。

七十幾つかの老人の遺体であったが、初めての経験なのに運悪く、大柄な頑丈な遺体であった。元大工さんで、飲み屋から自転車で帰る途中に転倒して、道路の側溝に頭を打って亡くなったのだそうである。

葬祭業という仕事柄、他の人が湯灌、納棺をするのを相当見てきたが、いざ自分がやってみると、汗ばかり出て作業がはかどらない。腕が硬直していて仏衣の袖が通らない。死体に抱きつくようにしないと、腰紐が通せない。

そんな様子を、二、三十人の親族や近親者が固唾^{かたず}を吞んで見ている。

最初抱いていた死への恐怖や死体への嫌悪感など消えてしまい、焦りと極度の緊張感に襲われ、何が何だか分からないうちに作業を終えた。

それでも帰り際には、通夜の読経が始まっているのに、喪主自らが玄関まで出てきて両手について丁寧^{ていねい}に礼を言った。何だか奇妙な感じであった。

帰宅すると、自分で風呂のスイッチを入れた。妻は怪訝^{けげん}な顔をしていた。

*

今日までこの地方では、この湯灌・納棺をする人は、死者の従兄弟か叔父や甥がするのが習わしとなっている。

選ばれた二、三人は、町内や村の長老や葬儀屋などの指示で、渋々行うのである。

なぜか使い古しのエプロンか割烹着を裏返しに着て、荒縄などでたすきをしたり、腰をしばったりした異様ないで立ちで行う。そして始めるのかと思うと、コップ酒をあと、わあわあと興奮しているだけで、一向に作業がはかどらない。一々口出しする船頭が多いせいもある。

湯灌というのは、長い間寝たきりの状態で死亡した死者を送り出すとき、せめてきれいな体にしてあげようと、全身を洗い清めた風習である。今日では、だんだん病院死亡が多くなり、アルコールで拭くという方式に変わってきている。しかしこの地方では、自宅死亡の場合昔からの風習のまま、水にお湯を足したへ逆さ湯などを用いて死者を拭き清めている。

船頭が多い上、やりたくないのにやらされた素人が酒をあおって行うわけで、死者を全裸にしたり、起こしたり横にしたりするものだから口や鼻や耳から血が出てきたり、不快な状況を現出させるわけで、取り巻く人々は死者への愛惜の念と死体への嫌悪感と死への恐怖などが入り混じり、いやがうえにも興奮状態が増幅されてゆく。

今日は、面食らった。まさか未だ座棺を用いている地区があるとは思ってもいなかった。

富山市の郊外の小さな村落で、ここ四、五年この村から死者が出なかったという。だから全市をまかなう新しい火葬場が出来ているにもかかわらず、昔ながらの村の座棺専用の焼き場で火葬するのだそうだ。

湯灌をし、仏衣に着せ替えるまではよかったが、座棺に納めるには死体を折りたたまなければならぬ。どうしてよいかわからない。

困った顔して逡巡していると、村の長老のような人が出てきて、「あんたさん、座棺初めてなわけ？」と助けてくれた。

帯紐だとか、きらしめの晒布などを用意して、足を折りたたんで胴と一緒に縛りつけるのである。なかなか足が曲がらず、ポキポキと音が出るほど締めつけないと棺に入る状態にならない。

もう十分だろうと思うのに、長老は余った晒布を老婆の遺体にぐるぐると巻きつけている。

靈魂を閉じ込めて出てこれないようにするためだそうである。

さつき遺体が寝かされてあった時は、胸に守り刀が置いてあった。それは悪霊が入り込まないように置くのだそうだ。

わからなくなってきた。とにかく葬送儀礼では訳のわからない事が多い。

*

あれからしばらく、湯灌・納棺の依頼がなかったが、ここにきて急に多く入ってくるようになった。

葬儀を受注してくる者が「納棺は当社におまかせください。当社に上手な人がいますから」と言い始めたらしい。

しかし、今日は参った。三カ所も予約が入ってしまった。三軒目の家へ出向いたのは、午後十時近くになった。

夜の村落では不幸のあった家はすぐ分かる。闇の中に煌々こうこうと電気の灯っている家が目指す家なのである。

その家の前の農道に五、六人の村人が立っていて、近づいた途端に怒鳴られた。通夜式の時間が二時間も遅れ、僧侶を三時間も待たしていることに、怒り心頭に発しているようだった。祭壇を飾りに来ていた同僚の社員が人質になっていた。